

日本現代文學全集

64

瀧井孝作・尾崎一雄・網野菊集

編集
伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷
昭和41年3月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者 瀧井孝作
尾崎一雄
網野菊

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 豐國印刷株式會社
製本 株式會社國寶社

東京都文京區音羽 2-12-21
郵便番號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替東京 8-3930

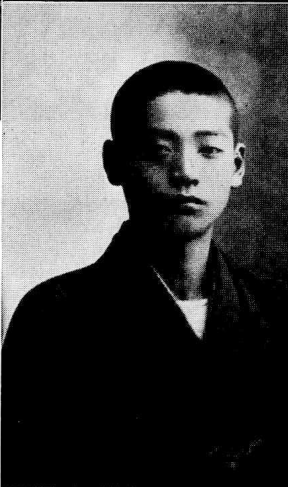
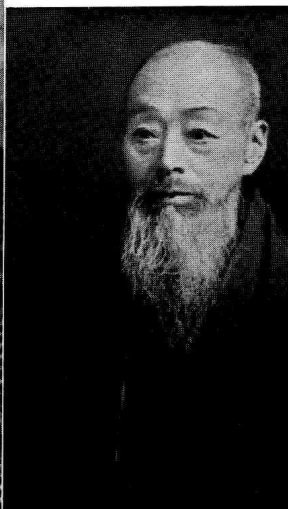
落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106641-2253 (2)

(文1)



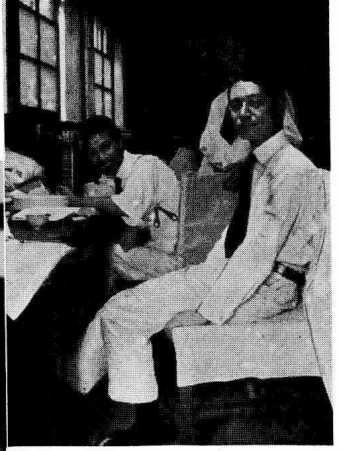
↓父 新三郎
(昭和六年
七十六歳)



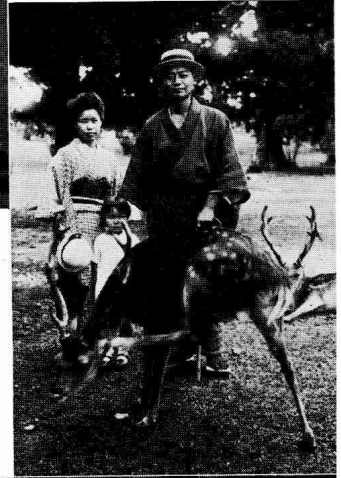
→明治四十二年頃 飛騨高山にて

↑昭和四十一年一月二十四日 八王子
市子安町の自宅にて 龍井孝作

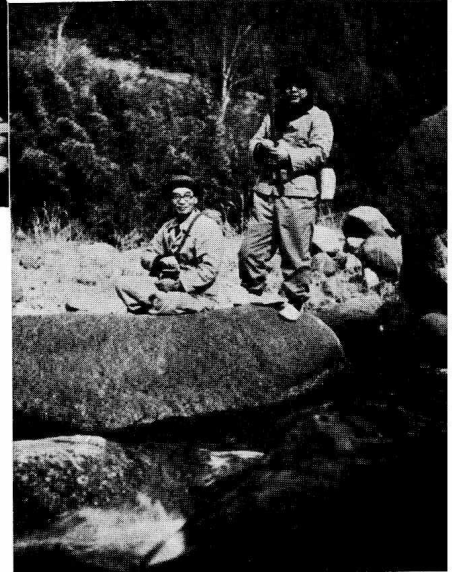
→大正九年夏
改造社創業當
時 田村町の
編集室にて
右から 孝作
村田秀治 横
關愛造



↓大正十四年九
月五日 奈良
市北天満町に
て 右から
志賀壽々子
志賀康子 志
賀萬龜子 長
女 利枝 孝
作 (撮影 志賀
直哉)



→昭和三年夏 奈良公
園にて 右から 孝
作 長女 利枝 妻
リン



↑昭和十一年 孝
作を囲む會 新
宿の料亭にて
前列 右から 田
畑修一郎 孝作
古木鐵太郎 古保
田與重郎 綱武
綱武 後列 右か
ら 尾崎一雄 檀一
中谷孝雄 雄淵
雄 外村繁 淺
見淵

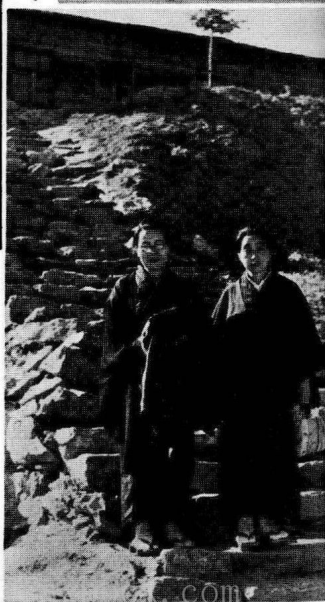
→昭和二十四年
三月三十一日
山梨縣下部溫
泉近くにて山
女釣り 右か
ら 井伏鱒二
孝作

←著書の一部





→大正九年三月 日本女子大卒業式の日 前列左 菊 →昭和二年四月二十五日 奈良 唐招提寺門前にて



→昭和十七年五月 満洲 大栗子鐵 鑛にて 右から 菊 大谷藤子



←昭和三十五年八月二日 中軽井澤 壺井家
山莊にて 右から 芝木好子 壺井榮 菊
室生犀星 壺井繁治 (撮影 杉村愼)

→昭和二十年頃 世田谷區北澤にて 妹 惠基子と



←昭和三十七年四月十四日 單行本「さくら
の花」により藝術選奨受賞の日 文部省に
て 前列左から 菊 宇野重吉 高峰秀子

→昭和三十六年一月 伊藤康安古稀祝いの日
早大隈會館にて 右から 菊 伊藤康安



→昭和三十九年十月十五日 東京驛にて 右
から 山田田鶴子 志賀直吉 志賀直哉
志賀康子 田林琴子 菊



↑昭和十二年一月頃
芥川賞受賞の半年前
牛込穴八幡境内にて
←昭和二十二年五月二
十四日「風報」創
刊號座談會 國府津
つたや旅館にて
から 坂口安吾 尾
崎士郎 一雄



→昭和二十四年 下會我的自宅近くにて
←昭和二十八年 「もぐら横丁」映畫化の際
佐野周二郎にて 右から 島崎雪子 佐野
周二 長男 鮎雄 妻 松枝 一雄



←昭和三十年二月四日
「群像」對談會の席に
て 右から 瀧井孝作
一雄



→昭和三十三年二月
「群像」創
作合評會 上野 千
萬喜にて
右から 上林 曉
一雄 外村 繁



↑昭和三十四年二月九
日 小田原市 吳清
源九段邸にて 右か
ら 吳清源 一雄
(撮影 報知新聞)

↑昭和三十四年十二月
二十一日 NHK教
育テレビスタジオに
て「日本の文學・
志賀直哉特集」録畫
の際 前列右から
武者小路實篤 志賀
直哉 一雄 後列右
から 安岡章太郎 志
賀直吉 河盛好藏
安場貴美子 阿川弘
之



→昭和三十九年七月十
二日 自宅に近い宗
我神社境内にて 前
列右から 妻 松枝
次女 圭子 後列右
から 長男の嫁 輝
子 長女 古川一枝
長女の婿 古川義光
一雄 長男 鮎雄
(撮影 主婦と生活社)



昭和二十八年七月二十日 俳句誌座談會
の席上 右から 大野林火 秋山秋紅 孝作 喜谷六花 荻原井泉水



↑昭和二十九年七月二十四日 芥川龍之介に因み兩國の花見物の際
前列右から 久保田万太郎 佐藤春夫 後列右から 三樹男 澤村孝 穴隆一 宇野浩二



←昭和三十三年七月 芥川賞選考委員會
右列右から 佐佐木茂索 井上靖 中村光夫 宇野浩二 佐藤春夫 左列右から 川端康成 丹羽文雄 石川達三 舟橋聖一 孝作

↑昭和三十年三月十五日 伊豆嵯峨澤溫泉にて 東府會のメンバーと 右から 阿川美代子 網野菊 米山文子 廣津桃子 田林琴子 廣津はま子 廣津和郎 志賀康子 安場貴美子 志賀直哉 孝作 阿川弘之 (撮影 阿川弘之)

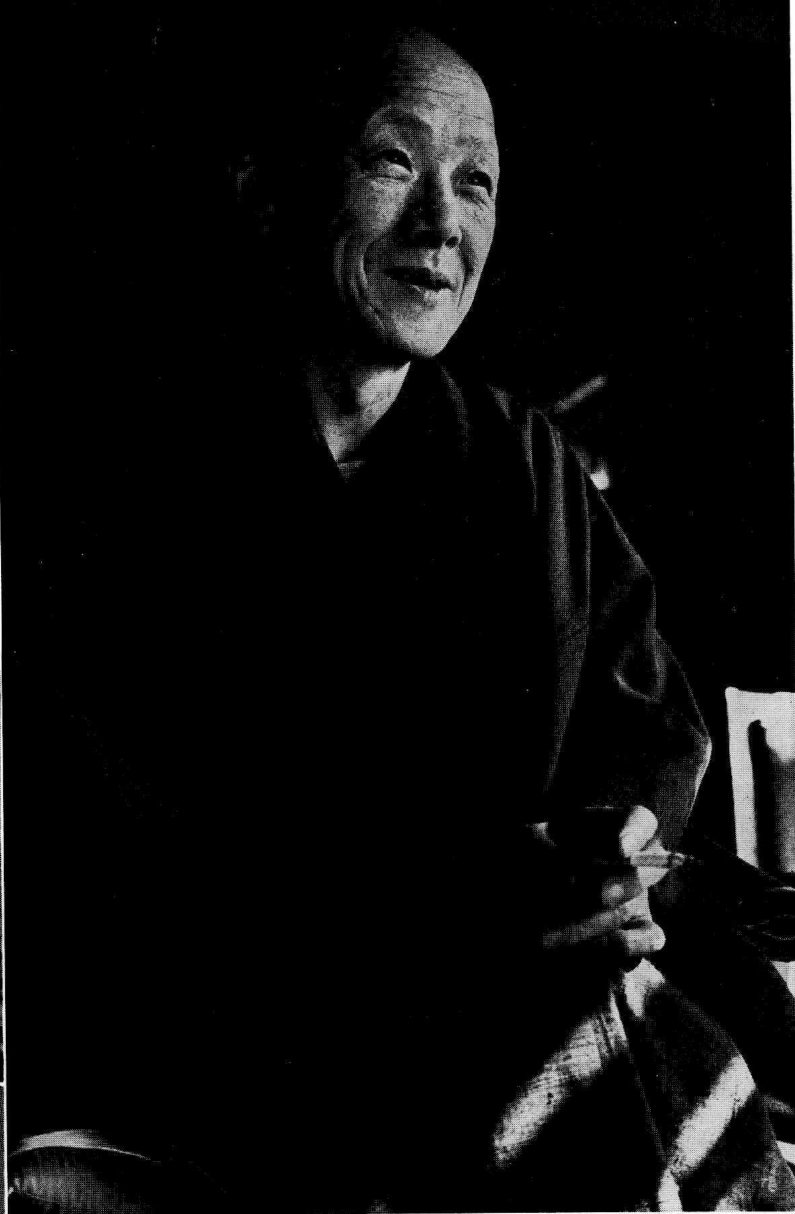


←昭和三十五年二月八日 志賀直哉の招きによる井伏鱒二・瀧井孝作藝術院會員祝いの會 田村町四川飯店にて 前列右から 尾崎一雄 孝作 井伏鱒二 志賀直哉 谷川徹三 後列右から 櫻井均 藤枝靜男 吉岡達夫 島村利正 網野菊 河盛好藏 阿川弘之



↑明治三十三年十二月
三重縣宇治
山田にて
父 八東
母 タイと

↓大正九年
早稻田高等
學院時代



↑昭和四十一年二月四日 小田原
市下會我的自宅にて 尾崎一雄

←昭和二年十二月四日 早大卒業後

瀧井孝作集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

無限抱擁……………七

龜田の娘……………六

養 子……………一〇

暑い日……………一四

大火の夜……………二三

蟹……………二六

伐り禿山……………三三

作品解説……………山本健吉 三六

瀧井孝作入門……………淺見 淵 三六

年 譜……………三九

参考文献……………四二

尾崎一雄集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

暢氣眼鏡……………一四

擬 態……………一五

父祖の地……………一六

玄關風呂……………一六

落 梅……………一七

蟲のいろいろ……………一六

瘦せた雄雞……………一四

トラの話……………一七

華燭の日……………一四

まぼろしの記……………二〇

夢 蝶……………二四

退職の願ひ……………二六

作品解説	山本健吉	三〇
尾崎一雄入門	淺見 淵	三七
年 譜		三九
参考文献		四三

網野 菊集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

海 邊

ゆれる葦

作品解説

網野菊入門

年 譜

参考文献

山本健吉 三二

淺見 淵 三九

三〇五

四二四

三六九

三〇四

瀧井孝作集

制
作
見
也
は

孝
任

無限抱擁

一

一の一

淺川驛よりトンネルもなくなり空は夜明であつた。

車室の窓ぎはで、一人、信一は、霧の間から麥の穂の赤むで居る有様に向いて、

「もう麥が赤む」

と呟いた。麥畠は知らぬ間に色づいて居る。暫時心ひかれた。彼はまた、

「戻つて来たなあ」

と自分に云うた。上の電氣の點つて居る、網棚に被り笠、糸立、岳樺の杖、(案内者が山刀で伐取り拵へて呉れた) 其が脇に置いてある。

彼は温泉で錆びた銀蓋の懷中時計を、セルの袴の上へ引出した。新宿へ到着までにまだ一時間の餘ある故、體は窓ぎはへもたれ彼は寝不足の頭を束ねた糸立へおし當てた。

浅い谷間の窓外に見える、東中野邊りて目が覺めた。車室に學生等が乗込んで居る。

信一は池袋までの切符故、新宿驛で降りて乗換をした。山の手電

車の中で、彼の風變りの提げて居る笠が目立つた。

朝曇りの空だつた。池袋の道の上を歩いて來、路端の新規に店出した小間物屋の前で、信一は齒みがきの類を買つた。

何時もの雜司ヶ谷の友達の家は、空屋であつた。信一は其板戸の前で暫時へんな氣がした。目白驛の方角の引越先が貼紙に出て居た。

而して信一は復歩いて、尋ね當てた。

原中で平家建で、友の古びた名札が門柱に掛けてある。生垣内は三坪程の前栽、其處の雨戸は閉され、まだ寝て居る。

其住居は始めてで信一は、起さずに一人門の前で立つて居た。信一は、盆槍佇むで旅行の引續の甘い感傷に浸るのだつた。曇の空から雨の粒が落ちた。僅かに降出し、信一は笠を提げてイむで居た。

錢湯を思ひうかべた。一晚石炭殻を被つた氣持の惡るさ、草臥が錢湯でぬけるなれば、自身は色色の仕事のある體故、すぐ其にかゝれると思へた。彼は、歩き出した。

雨は本降りになり一時間程後、信一は戻つて來た。被り笠糸立で、湯上りの彼は汗ばむだ。著物の銘仙の羽織に沁こんで居る、温泉の香がきつく匂つた。

門は未だ開かなかつた。

やがて、遅く起きた中田夫婦は、信一を内へ入れた。

彼は、雨水の笠と糸立は外へ寄かけ、上り口に袴を脱いで置いて、座敷へ入るのであつた。

床の間を見て、一寸見てゐた。白日掩荆扉とある半折の出來榮が目についた。

中田が薄目で、眼鏡の玉をぬぐひつゝ來て坐つた故、彼は尋ねた。

「先生の字」

「六花さんだ。先生の處にころがつてゐたのを貰つてきた」

中田は同人の書の會に加らぬ人であつた。其趣味は厭だと云う